

## 「本覚坊遺文」論

— 千利休像と作家井上靖 —

高 本 伸 幸

### はじめに

井上靖の「本覚坊遺文」は、『群像』昭和五十六年一月号から八月号にかけて計六回、不定期連載された。太閤秀吉から死を賜った千利休について、弟子の本覚坊の視点を通して語った長篇小説である。第十四回日本文学大賞を受賞し、井上靖の晩年における代表作の一つに数えられている。

この「本覚坊遺文」は連載完結以来、いわゆる歴史小説でありながらも、作者自身の内面が託された「心境小説」あるいは「私小説」<sup>①</sup>だと評されてきた。中でも福田宏年は『増補井上靖評伝覚』（平成三年十月、集英社）の中で、次のように論じている。<sup>②</sup>

（前略）「本覚坊遺文」はすでに歴史小説ではなく、歴史小説の形を借りて、作家生活の最後の飾り方、つまりいかに死ぬかを自らに問いかけたものと見るべきであろう。（中略）この作品の背後からは、自分もまた文学の現場で白刃を振って死と対決し、切り死にして果てたいという、作者自身の張りのある声が聞えてくるような気がする。

「本覚坊遺文」には、確かに井上靖の心境が多分に反映され、これら先行論の指摘は概ね妥当と言える。しかし、この小説を歴史小説の形を借りた「心境小説」と捉えるにあたって、その内実について具体的かつ適切な考察が為されてきたとは必ずしも言えない。中でも〈利休の死（切腹）〉を扱った「本覚坊遺文」から、執筆時に満七十四歳を迎えた井上靖の心境、特に作家として「いかに死ぬか」という自問を読み取る福田宏年の見解は、作者のモチーフを部分的に押さえつつも、いまし違った角度から捉え直す必要がある。

結論を少し記せば、「本覚坊遺文」には、井上靖の特に〈作家〉としての心境が表れている。それは「いかに死ぬか」という自問以上に、自らの創作活動を振り返った作者の創作観、文学観の表れと言える。以下に考察を進めたい。

### 一

「本覚坊遺文」はタイトルに見るごとく、千利休の弟子であった本覚坊なる人物が遺した手記という体裁を取っている。一章から五章ま

で、それぞれ東陽坊、岡野江雪斎、古田織部、織田有楽、千宗旦ら千利休と縁ある五人が登場。本覚坊と彼らが利休との思い出を語り合いつつながら物語は進行する。五章に続く終章は、五人と語り合った本覚坊が利休の思い出を改めて想起し、最後に利休の切腹当日を夢に見ている。

井上靖はこの「本覚坊遺文」執筆にあたって、桑田忠親編著『利休の書簡』（昭和三十五年十二月、河原書店）を参照し、歴史学者の熊倉功夫や茶道研究家の江守奈比古から史料提供を受けたと明かしている。<sup>③</sup>「本覚坊遺文」は基本的には史料に拠った、いわゆる歴史小説と言える。

しかし、この小説の主人公・千利休の場合、「茶人」としての「大きな」「非凡さを知る直接史料というものはない」。「利休を偶像化、神格化した」「説話」の類が多い。<sup>④</sup>従って千利休を小説化するには、史料に拠るだけでは限界があり、作者の想像を含んだ独自の見解を押し出しながら、同時にそれが独断と受け取られないよう配慮していかなければならない。そこで創り出されたのが、この小説の語りの方、（本覚坊遺文）であつたと言えよう。本覚坊は利休の弟子として、史料にもわずかに顔を覗かせている人物であるが、その手記は実在せず、井上靖の創作である。<sup>⑤</sup>

この小説における利休の侘茶と人物像は、本覚坊が東陽坊以下五人の証言に自身の感想を加え、集約する形で表されていく。史料に拠るつつも、作者を背後に控えた本覚坊の語りが仲介となつて、井上靖の見解を多分に含ませた利休造形と言えよう。しかし、それは歴史上にも存在した本覚坊の名の下で語られていくため、歴史的な重みを自然に

加えながら読者に伝わる。しかも最終的には本覚坊個人の意見を書いたことになる故、異説等を含めた史料との相違は責められずに済む。井上靖個人の見解が史実を軽視した主観と受け取られることを防ぐ装置として、本覚坊による語りが機能しているのである。そして「本覚坊遺文」が史料に拠った歴史小説でありながら、これまで作者の心境小説とも評されてきたのは、この語りの形式に拠つて、井上靖自身の内面がより自由に表れた結果だと言えよう。

ちなみに秋吉好は、この井上靖が設定した語り手について、「歴史上の本覚坊遍好とは、まったく違う」と批判し、「安易な史実の変更」だと断じている（「三井寺本覚坊遍好の実像」、平成二十二年十二月『異土』第二号）。この秋吉の考察は、「本覚坊遺文」発表から約三十年を経て同作を捉え直した試みとして注目に値する。しかし井上靖が「本覚坊遺文」を執筆した当時には未発掘であつた新史料に多くを拠っている故に、創作方法に対する批判としては必ずしも適切と言えない。<sup>⑥</sup>本論では上述のごとく、作者の自由な見解を歴史的なリアリティーを保つて表現できる語りの方法として評価したい。

## 二

井上靖が本覚坊の語りを通して、千利休をどのように描いているか、少し具体的に確かめてみたい。

一章において、東陽坊との対話の中で、太閤の勘気に触れ追放の命を受けた利休が話題となる。その折、本覚坊は、天正十九（一五九一）年二月十三日、謹慎先の堺へ向けて淀川を降った船上の利休の姿を想

像する。そして実際に見たわけではないその利休の顔が、ある茶事で自分が直接見た利休の顔と同じだと考えている。天正十六（一五八八）年九月四日、古溪和尚送別の茶事である。古溪は太閤の怒りに触れ、九州への配流が決まっていた。利休はその茶事を太閤の邸宅・聚楽第の屋敷内にて開催し、床には大胆にも太閤から預かった掛物を無断で使用していた。

一つは想像により、いま一つは直接目にした、これら利休の顔について、本覚坊は次のごとく語っている。

（前略）堺へ降る船の中の師利休のそのお顔も、お姿も、太閤さまにお向けになつてゐるお顔であり、お姿である、そういう思いが強くなつております。それから聚楽第のお屋敷に於いてのそれは、太閤さまの御権力へお挑みになつたものであり、堺へ降る船の中のお顔やお姿は、それに対する太閤さまの仕返しを、面を上げてお受けになつてゐるそれであるという、そんな気がしてなりません。

太閤による追放の命を受けて利休が淀川を降るエピソードも、古溪和尚送別の茶事も、どちらも多くの利休関連の文献で史実として言及されている。特に後者の茶事には、本覚坊が同席していたことがわかっている。一方、ともに「太閤さまにお向けになつてゐる」という利休の「お顔」「お姿」は、もちろん井上靖の創造である。

井上靖は史料を参照した上で、太閤という権力に挑み、権力による仕返しを逃げることなく、正面から受ける人物として利休を描いているのである。利休と太閤の対決の姿勢が強調されていると言ってもよ

い。例えばそのことは、四章における織田有楽の台詞からも確認できよう。利休の侘茶は「遊びではなくな」つたと言ひ、かつ利休が好んだ狭い茶室は「とかく真剣勝負になる。真剣勝負になると、勝ち負けになる。（中略）死を賜りかねない」と語っている。利休は太閤に臆せず、死をも恐れず、自らの侘茶に真剣に取り組んだ、いわば気性の激しい人物として繰り返し強調されているのである。

なおこういった利休像において、一つ注意すべきことがある。右の引用に明らかなように、語り手・本覚坊は、自らの発言の多くを「そういう思いが強くなつております」「そんな気がしてなりません」といった類の語句で結んでいる。これらの利休像は、あくまで本覚坊の目に映り、本覚坊が思い、考えたそれとして描かれている。先にも指摘した通り、歴史離れとの批判を受けずに、自らの見解を自在に打ち出していく方法として、井上靖は本覚坊にこのように語らせているわけである。

二章に目を向けると、岡野江雪斎との対話を切つ掛けに、本覚坊は山崎の妙喜庵の茶室での、ある出来事を思い出している。茶室には利休の他に二人の人物が存し、外に居た本覚坊の耳には、茶室の中から次のような激しい口調が聞こえてくる。

—— “無”と書いた軸を掛けても、何もなくなりません。 “死”と書いた軸の場合は、何もかもなくなる。 “無”ではなくならん。 “死”ではなくなる！

本覚坊は、茶室に利休が迎えていた二人の客人の中、一人は利休の

弟子の茶人・山上宗二であり、右の言葉を発したのも彼ではなかったかと考えている。さらにもう一人については、後ほどこれも利休の弟子の茶人・古田織部ではなかったかと推測している。千利休、山上宗二、古田織部の三人は、いずれも切腹による死を迎えている。本覚坊は、この妙喜庵の茶室での一席は三人が死の盟約を取り交わした場であつたに違いないと捉えるのである。

山上宗二らしき人物が発した「無」ではなくならん。「死」ではなくなる」については、利休関連の文献に見ることはできない。この場面は井上靖による明らかな創作と言える。<sup>8</sup>

この場面と関連して、四章では、織田有楽が「宗二も腹を切った。利休どのも腹を切った。織部どのも腹を切った。茶人というものはみんな腹を切る」と語った上に、さらに次のように話している。

——利休どのはたくさん武人の死に立ち合っている。どのくらいの武人が、利休どのの点てる茶を飲んで、それから合戦に向かったことか。そして討死したことか。あれだけたくさん非業の死に立ち合っていたら、義理にも畳の上では死ねぬだろう。

本覚坊は、これら織田有楽の言葉を受けて、利休は「たくさん武人の方々の死の固めの式に立ち合つた」との感想を抱く。

すなわち井上靖は、「本覚坊遺文」において、千利休はもちろん、利休門下の山上宗二、古田織部の二人をも含めた彼ら三人の侘茶について、戦国乱世という時代背景を重視している。そこから茶の席は、自らの死を覚悟する「死の固めの式」だと捉えているのである。利休、

宗二、織部ら三人は、侘茶の席を通して常に「死」と向かい合い、自らも最後は「腹を切る」に至った茶人として描かれているのである。

利休の侘茶を「死の固めの式」と捉える、この「本覚坊遺文」での解釈は、野上弥生子「秀吉と利休」（昭和三十七年一月〜三十八年九月『中央公論』）など、本作に先行する利休を扱った作品には見られない。井上靖の独創として評価できる。旧制第四高等学校在学中には柔道部主将であつた井上靖は、如何にも気性の激しい人物であつたことが知られている。<sup>9</sup> この作家らしい侘茶の表現と言えよう。利休の人物像として、井上靖その人が如実に反映されていると言つてもよい。

しかしこの小説においては、利休自身が「死の固めの式」を行わねばならなかった直接の原因、つまり「利休はなぜ太閤から死を賜ったか」について、必ずしも十分な追求が為されていない。五章にて、利休の孫である宗旦との対話の後、本覚坊は次のごとく推測している。

永年、あのように重く用い、いかなることもお許しになつていた御茶頭利休に対して、太閤さまがあのようにお怒りになるといふことは、あの時期に於ては、ただ一つの場合しか考えられないのではないかと思います。御自分が全力を挙げて為しとげようとしており、そしてその時の到来を、今や遅しと、息をひそめて待つておられた朝鮮出兵の問題に関して、師利休がお気に召さないことを口走り、それがお耳に入つたということでありましょうか。

この本覚坊の語りは、野上弥生子「秀吉と利休」を如何にも彷彿させる。同作では、石田三成の画策もあつて、利休の些細な呟きが、「唐

御陣（注、朝鮮出兵）は明智討ちのようにはいくまい」と発言したという噂になって広まり、それが太閤の耳にも届き、勘気を蒙ったと記されているのである。

井上靖が「秀吉と利休」を読んでいたのは、エッセイ等から明らかである。<sup>10</sup> 桑田忠親は『千利休研究』（昭和五十一年十二月、東京堂出版）で、「秀吉と利休」の影響もあって、朝鮮出兵反対説が利休賜死の原因として一般に広く定着したものの、「史実としては、残念ながら、実証性に欠けるし、傍証も、納得性もない」と書いている。「本覚坊遺文」も「秀吉と利休」の影響を受け、その解釈を幾分安易に受け継いでしまった気配がなくもない。おそらくそうした側面もあったであろう。

しかし、このことは、「本覚坊遺文」における井上靖の表現意図を逆説的に示しているよう。「本覚坊遺文」は、史実に基づいた歴史小説の体裁を取りつつも、〈利休の茶〉及び〈利休の賜死〉に関わる〈歴史の真実〉を本格的に明らかにしようとした小説では決していない。史料に拠った千利休像を表のモチーフとして見せながらも、実は語り手・本覚坊の、その自在な語り口の中に、より重要な井上靖の裏のモチーフを隠しているのである。

### 三

本論冒頭で触れたように、福田宏年は「本覚坊遺文」から、作家として「いかに死ぬか」という井上靖の自問を読み取っている。利休の侘茶を「死の固めの式」と捉える解釈より、執筆時に満七十四歳を迎

え、自分の死を意識し始めた作家の心境が確かに窺われよう。この小説の側面として、決して否定すべきではない。

ただし、その上で注意したいのは、戦国時代を背景とした利休の侘茶について、この小説では現在進行形で描いていないことである。一章は利休の切腹から約六年後にあたる慶長二（一五九七）年に設定され、以降章を追うごとに時代は下り、終章は利休の死から約三十年後、元和八（一六二二）年となっている。その最も早い段階である一章において既に、東陽坊が本覚坊との対話の中で、「乱世の茶も終った!」「茶室に入って茶を頂き、茶室を出ると戦場に向かう（中略）そういう時代は終ってしまった」と語っているのである。

しかも大坂夏の陣の後に自刃した古田織部を除いて、語り手・本覚坊を含めた主要登場人物五人は、物語の現在において、戦乱の渦中に在るわけではなく、死に直面した立場に置かれてはいない。利休の侘茶を次第に遠ざかりつつある戦国乱世のそれとして回顧し、東陽坊も、岡野江雪斎も、織田有楽も、時間の経過によるごく自然な死を迎えている。だとすれば、この小説における「死」と「乱世」は、作家が執筆時に直面していた相手というよりも、それ以上に過去を顧みて想起された何かとして捉えるべきではないか。

そのように考えると、本覚坊の語りの中から、物語の冒頭と結末近くにそれぞれ置かれた、二つの場面が重要な意味を持つて見えてこよう。

まず一章の中で、本覚坊は次のように語っている。利休の切腹から「二十日ほど経った頃」に見た「夢のお話」である。

冷え枯れた磧の道が一本続いております。余人の誰もが踏み込めようとは思われぬ、一木、一草とてない、長い長い小石の道でございます。(中略)／その時ふと気付いたのですが、私からかなり離れた前方を、もう一人の人間が歩いております。すぐ師利休だと気付きました。ああ、自分は師のお供をしてこの淋しい道を、冥界の道を歩いているのだと思いました。(中略)／そうだ、いま自分は師のお供をして、聚楽第に向かっているのだと思いました。誰もが踏み込めない冷え枯れた磧の道は、やがて京の都に入って行くことでありましょう。(中略)／その冷え枯れた磧の道が、京の町のただ中を突切って聚楽第の中に入っている(後略)

次いで終章にて、本覚坊は以下のごとく語っている。織田有楽の葬儀に向かうも悪寒に襲われて引き返し、その際の半ば夢のごとき体験である。

(前略) ああ、この道はいつか師利休のお供をして歩いた、あの夢の中の道だと思った。(中略)冷え枯れた磧の道が一本続いている。

(中略) あの夢の中で、冥界の道というのはこのような道ではないか、それですべてどうして、このように魂の冷え上がる淋しい道が続いているのであろうかと思ったが、今も全く同じ気持であった。

(後略) ／いま師と自分が歩いている道は、まさしく京に入り、聚楽第のまん中を突きぬけ、それからまた京を出て、更にその先へ真直ぐにどこまでも伸びている道であるような気がする。そしてその道のずっと先を、師はおひとりでお歩きになっていらつしやるので

ある。(中略)／師おひとりの道である。師以外、誰も踏み込めぬ道である。師以外誰がこのように淋しい道に立ち入ることができるであらうか。

これら本覚坊が夢の中で見た「冷え枯れた磧の道」とは、言うまでもなく、文壇デビュー作・小説「胤銃」(昭和二十四年十月『文学界』)において、「落莫とした白い河床」として描いて以来、井上靖が繰り返し表してきた象徴的イメージである。「冷え枯れた磧の道」を歩く利休によって何が表現されているのか、それを読み解くことで、この小説のモチーフがより深い場所から明らかとなろう。

右の引用のどちらにも、その道が「冥界の道」のようだと記されている。従って、そのイメージは、利休の侘茶の道が戦国乱世の中、死を覚悟した取り組みであったことを直接には表している。また小説「胤銃」では、「落莫とした白い河床」が描かれた作中詩において、「中年の孤独なる精神と肉体」との詩句が見られ、小説に先行する散文詩「胤銃」(昭和二十三年十月『詩文化』)にも、「人生の白い河床をのぞき見た中年の孤独なる精神と肉体」と記されている。これらと同様に「本覚坊遺文」でも、「冷え枯れた磧の道」が「魂の冷え上がる淋しい道」であり、「師おひとりの道」であることが繰り返し強調されている。

つまり本作における「冷え枯れた磧の道」は、侘茶の道で死と向かい合いながら、誰にも頼ることなく一人闘う、利休の孤独な生の表現だとひとまず言えよう。

小説「胤銃」で「白い河床」を描いてから約五年後、井上靖は『大



衆文学代表作全集8井上靖集』(昭和三十年三月、河出書房)の巻頭に次のような自筆筆硯を掲げている。

戦国時代ほど人々の運命があらわに見える時代はない。

月光に照らし出された一本の川筋のように。

これは「白い河床」そのものではないが、「白い河床」を大いに彷彿させる。「本覚坊遺文」における「冷え枯れた磧の道」は、このイメージと同様に、「利休の孤独な生」を戦国時代の一つの運命として浮かび上がらせているとも言えよう。

井上靖は「風林火山」(昭和二十八年十月〜二十九年十二月)『小説新潮』を初めとする戦国物、いわゆる時代小説を数多く手掛けている。それらは武士同士の戦いを物語の中心に据え、合戦の場面を躍動的に描いている。こういった娯楽色の強い時代小説とは大きく視点を変え、「本覚坊遺文」は、利休の侘茶を中心に戦国時代を捉え直した小説でもある。実際「本覚坊遺文」の終章では、語り手の夢の中で、利休が「冷え枯れた磧の道」を「戦国乱世の茶の道」で「利休ひとりの道」だと言い、ただし利休の「少し先」を「山上宗二」が、利休の「あと」を「古田織部」が「歩いて行っている」とも語っている。「戦国乱世」に生きる茶人として、利休、宗二、織部の三人は侘茶に命がけで取り組み、「切腹」という最期に向かっていく。その「運命」の過程が「冷え枯れた磧の道」としてイメージされているのである。

さらに井上靖が「本覚坊遺文」執筆の構想を本格的に練り始めていた時期の文章を挙げてみたい。幾つかのエッセイや対談等から、井上

靖は昭和五十年前後から、同作執筆の準備を本格化させていたと推察できる。<sup>11)</sup>

まず井上靖は、茶道の心得をタイトルに付したエッセイ「わが一期一会」(昭和四十九年五月五日〜五十年一月二十六日『毎日新聞(日曜版)』)を連載する中で、「自分の過去を埋めている茫々たる磧」との語句を用いている。<sup>12)</sup>

次いで自伝エッセイ「過ぎ去りし日日」<sup>13)</sup>(昭和五十二年一月一、三日〜三十一日『日本経済新聞』)においては、次のように語っている。

芥川賞を受けたのが(注、昭和)二十五年だから、作家生活二十六年、その間に、ざっと算えて、長、中篇併せて五十篇、短篇百八十篇を書いている。(中略)こうした作品の群れが、自分の歩いて来た道を埋めている。／＼その自分が作家として歩いて来た道を振り返って見ると、茫々たる雑草がかなり長い一本の道を埋めている感じである。(中略)また時には、雑草に覆われた道には見えないで、一本の長い磊々たる磧の道に見える。大小の石がごろごろ転がっている。この方もまた荒涼たる眺めである。(中略)／＼ともあれ、雑草の道であれ、磧の道であれ、私が自分の足で歩くことによつて造つて来た道である。自分の足跡である。(中略)そして私がこれから歩く道も、これに続いてのびてゆく。

「茫々たる磧」「一本の長い磊々たる磧の道」とは、言うまでもなく「白い河床」であり、それ以上に「冷え枯れた磧の道」に重なるイメージである。「白い河床」と同様に、これら二つのエッセイで描かれた

イメージも、「本覚坊遺文」へとモチーフが通底している可能性が高い。井上靖は「わが一期一会」において、自らの人生で経験した大切な出会いを振り返り、「過ぎ去りし日」では、自身の人生、特に作家として歩んできた過程を振り返っている。「本覚坊遺文」においては、「冷え枯れた磧の道」を利休に歩かせることで、戦国乱世における利休の孤独な生を表しつつ、文壇的処女作「獵銃」と芥川賞作「闘牛」（昭和二十四年十二月『文学界』）に始まる作家自身の創作活動の過程を半ば無意識のまま振り返っていたのではないだろうか。

例えば「本覚坊遺文」一章では、語り手と東陽坊との対話によって、利休の言葉「侘教寄常住、茶之湯肝要」を紹介し、二章では、やはり本覚坊と岡野江雪斎の対話の中で、連歌の言葉「枯レカジケテ寒カレ」に対する利休の師・紹鷗の感想「茶ノ湯ノ果テモカクアリタキ」を取り上げている。対して井上靖は「過ぎ去りし日」の連載終了より約半年後、「枯れかじけて寒き」（昭和五十二年七月『季刊芸術』）と題するエッセイを発表し、その中で利休、紹鷗によるこれらの言葉を紹介している。そして、彼らに倣った作家としての「自戒の言葉」として、「作家精神、常住に候、創作、肝要に候」「文学の果てもまたかくありたき」「枯れかじけて寒き、常住に候、創作、肝要に候」と書いている。<sup>14</sup>井上靖が、本覚坊の視点によって茶人・利休を描きながら、作家としての自らの在り方を見つめ直していたことは、これらの表現からも確かめられよう。

加えて井上靖は、これも「過ぎ去りし日」の中で、「闘牛」（昭和二十四年十二月『文学界』）による芥川賞受賞に触れ、その際に佐藤春夫から貰った次のような言葉を回想している。

——あなたは何でもこなせるからジャーナリズムは放っておかないでしょう。橋はすでに焼かれた。あとは斬死するばかりですよ。

井上靖は芥川賞受賞直後に発表したエッセイ「文学と私」（昭和二十五年七月『沼津東高新聞』）の中でも、この佐藤春夫の言葉を取り上げ、「私が多くの先輩友人から得た激励の言葉の中で、これが一番心にしみた有難い言葉だった」と記し、「文学することのきびしさを戦場にたとえ、そこで倒れるまで闘えという意味で、文学することが、いかに苛烈なものであるかを、（注、佐藤先生は改めて私に論じて下さったのであった）と書いている。

文壇デビューからおよそ十年間、昭和三十年代半ばに至るまでの井上靖の創作活動は、まさにこの佐藤春夫の言葉に暗示された通りであった。文芸誌に限らず、新聞、週刊誌等を含めた巨大ジャーナリズムより注文が殺到し、井上靖はそれらを全て断ることなく引き受け、「昭和二十五年から昭和三十五、六年に至るほぼ十年間は、これが一人の人間に書き得るかと思われるほど多作をしている」<sup>15</sup>。例えば昭和二十六年には、一年間で長篇、短篇併せて三十七本もの小説を発表するほどであった。<sup>16</sup>

しかしここで重視したいのは、この佐藤春夫の言葉に対する井上靖の受け止め方である。ジャーナリズムから注文が殺到し、濫作せねばならないであろうことを予想する佐藤の言葉に対して、井上靖は決して怯えることなく、むしろ感謝し、前向きな姿勢で受け止めている。そして佐藤春夫から頂戴したこの言葉について、敢えて「斬死」とい



う表記を用いているのである。「斬死」という表記は辞書に掲載されておらず、これは本来「惨死」と書くべきところであろう。

すなわち芥川受賞の直後、井上靖は近い将来における自身の作家像を、「戦場」で斬り合うごく闘い、「切腹」をも覚悟する武人のように思い浮かべていたわけである。さらに「過ぎ去りし日日」を執筆した時点においても、多作を続けた文壇デビューから約十年間の自分の姿について、やはり同様のイメージで回想していたのである。それは「文学の現場で白刃を振って死と対決し、切り死にして果てたい」という、福田宏年が指摘する七十四歳の井上靖の自問と通じつつも、決して同じではない。井上靖は作家デビュー当初より、つまり晩年に至って死を意識するより遙か以前から、小説の創作を単なる知性の産物でなく、命がけで取り組むべき行為と見做してきた。年齢や肉体の衰えとは無関係に抱いていた、その独特の創作観が、「本覚坊遺文」には表出されているのである。

ここに来て「本覚坊遺文」における千利休像が、井上靖の人物像を単に反映しているだけでなく、井上靖の考える作家のあるべき姿、一つの理想像に裏打ちされていることに気付かされよう。「斬死」を覚悟した〈作家・井上靖〉の激しい創作姿勢が、「切腹」を覚悟した〈茶人・利休〉の侘茶への取り組みとして、ごく自然に表れているのである。

物語のほぼ末尾に近い終章の一場面にも目を向けてみたい。利休は本覚坊の夢の中で、切腹直前に太閤と対話し、「上さまのお力に随って」「多勢の方々をそこ（注、利休の茶室「妙喜庵」）へ入れようと思」ったのが「とんでもない間違いで」あり、妙喜庵の茶室には「自分ひ

とりがそこに坐っていればよろしかった」と語っている。「侘茶の世界」は「長い間、私にとつては不自由な世界であった」が「上さまから死を賜」り、「自分の死を代償として」「生き生きした、しかも自由な世界に変」ったとも述べている。

この利休の台詞の奥から、以下のごとき作家のモチーフが垣間見えるよう。

井上靖は文壇デビュー直後から「多勢」の読者を獲得し、間もなくベストセラー作家へと昇りつめた。だが、実は多くの読者から迎えられていたその約十年間こそ、作家として最も「不自由」な時代でもあった。ジャーナリズムの様々な要請に応えるべく、書きたい作品を思うように書けない状況が続き、小説の創作とは本来「自分ひとり」のために為すべきだとある時期から考え直した。井上靖は自身の創作活動を振り返って、そのような感慨を抱いていたのである。深読みすれば、利休の侘茶を「多勢」に広め、しかし彼に「死」を賜った「上さま（太閤）」によって、井上靖をベストセラー作家へ押し上げ、また彼に「斬死」を強いるごく濫作させた巨大ジャーナリズムが象徴されているとも言えよう。

実際、井上靖は昭和三十年代終盤以降、多くの読者に触れる新聞・週刊誌等は主要な発表舞台とせず、次第に作品量を減らしていった。昭和四十年代に入れば、小説の発表は連載も含めて一年間に片手で足りる本数となり、そのまま「本覚坊遺文」連載まで至っている。井上靖が作家として「自由な世界」を手に入れるべく、創作の姿勢を改めていったのは明らかである。井上靖は六十歳代に入ってから、つまり昭和四十二年以降の自らの創作について、たとえ新聞を発表舞台にし

た小説においても「文学雑誌に書く場合と同じように、ただ一人の読者のことも考えないで、自分自身のために書くということになる」と記している（「過ぎ去りし日」）。

先述のごとく井上靖は「斬死」をも恐れぬ激しい創作姿勢を強く肯定している。だが、それは作家としての出発期の場合であった。井上靖の次男卓によれば、井上靖は文壇デビュー当時を振り返って、「出だしは、量だね。量をこなせなければダメだ」と語っていたらしい<sup>(18)</sup>。従って作家としての「出だし」を過ぎた段階から、利休が死を代償に「自分ひとり」のためだけの侘茶を取り戻したごとく、作家は自分のために、納得のできる作品を書いていくべきだとも考えていた。自らの作家人生において、濫作期を乗り越えてから抱いた、井上靖のいま一つの理想像が、やはり利休像を通して、それとなく表現されているのである。

千利休の歩く「冷え枯れた磧の道」は「聚楽第に向か」い、その「聚楽第のまん中を突きぬけ」、さらに「どこまでも伸びている」。（茶人・利休）をそのように回顧する語り手・本覚坊の背後には、ただなる作者でなく、この小説を執筆した時点から自らの創作活動を振り返り、見つめ直した、昭和五十六年現在の（作家・井上靖）が隠されている。井上靖がこれまで歩んできた、そしてこれからさらに先へと進んで行くこうとする作家の道が、「本覚坊遺文」には秘かに、しかし力強く示されているのである。

## おわりに

「本覚坊遺文」は史実に基づきつつも、視点人物・本覚坊の語りを通して、井上靖自身の見解を自在に表現している。千利休を戦国乱世の中、死と向かい合いながら侘茶に取り組んだ、気性の激しい人物として描いている。そしてその千利休に「冷え枯れた磧の道」を歩ませることで、文壇デビュー以降約十年間の濫作期を中心に、作者自身の創作活動を振り返り、今後を展望している。歴史小説の形を借りながら、この作家のいわば文学観をも窺わせる稀有な小説として、「本覚坊遺文」は井上靖文学を考察する上で、貴重な手掛かりを提供しているのである。

## 注

- (1) 篠田一士「文芸時評」（昭和五十六年七月二十七日『毎日新聞（夕刊）』）、佐々木基一・三木卓・磯田光一「第六十九回創作合評」（昭和五十六年九月『群像』）、佐々木基一・大庭みな子・黒井千次「読書鼎談―井上靖『本覚坊遺文』―」（昭和五十七年三月『文芸』）参照。
- (2) 福田宏年は『本覚坊遺文』の周辺（昭和五十七年一月二十七日『聖教新聞』）、「書評・井上靖著『本覚坊遺文』」（昭和五十七年二月『文学界』）でも、ほぼ同様の意見を書いている。
- (3) 『本覚坊遺文』ノート（昭和五十七年八月『群像』）参照。
- (4) 注（3）に同じ。
- (5) 「本覚坊あれこれ」（昭和五十七年七月『波』）参照。
- (6) 秋吉好は「三井寺本覚坊遍好の実像」（平成二十二年十二月『異土』第二号）で『利休大事典』（平成元年十月、淡交社）や「園城寺再興略記」

（園城寺編『天台寺門宗教文化資料集成・歴史編・園城寺記録』平成十九年十月、園城寺）を自説の根拠に用いつつ、「井上靖の本覚坊遍好の造形」と「史料にあらわれた本覚坊遍好」には「ずいぶん相違」があり、「史料の取捨選択による史実の改変」が為されていると批判している。

しかし、これらの文献とともに井上靖が「本覚坊遺文」を執筆した当時未刊であり、特に後者は作者の死後の出版である。小説発表から約三十年を経て同作を捉え直した試みとして注目に値するものの、創作方法の批判としては適切と言い難い。秋吉はその一方で、「彼（注、井上靖）は本覚坊遍好の名前で書く必要はなく、正々堂々と架空の利休に仕えた弟子を設定するべきであった」と指摘している。「本覚坊遺文」の後、井上靖が「孔子」（昭和六十二年六月）平成元年五月『新潮』において、架空の弟子・蔣薫による語りを創造したこととも関連し、説得力ある見解と言える。

（7）井上靖が「千利休」「本覚坊遺文」ノート」等のエッセイで書名を挙げている桑田忠親『千利休』、堀口捨己『利休の茶』、唐木順三『千利休』の三冊を見ると、天正十六年九月四日の茶事がいずれも取り上げられ、本覚坊の名前も確認できる。また桑田忠親『千利休』、唐木順三『千利休』では、太閤による追放の命を受けた千利休が淀川を船で降って堺へ帰ったこと、その際に細川三斎、古田織部の見送りを受けたエピソードを紹介している。なお『利休大事典』の中で、米原正義は天正十六年九月四日の茶事について、「これまで『古溪和尚送別の茶会』として注目されていた」が、古溪が実際は出席していなかったであろうこと等を理由に挙げ、「古溪送別の茶会でなく、古溪想望の茶会であろうと思われる」と新説を出している（加筆の上、『天下一名人・千利休』（平成五年

三月、淡交社）に収録）。秋吉好も前掲の論でこの説に触れ、作中と史実が異なる根拠の一つとしている。しかし注（6）に書いた通り、井上靖が「本覚坊遺文」を執筆した際には知り得なかった新説であり、ここに紹介するに止める。

（8）山本健吉は『死』か『無』か―『本覚坊遺文』一説―（昭和五十九年四月『すばる』）の中で、井上靖からの伝聞として以下のように書いている。井上靖はこのエピソードより該当の場面の想を得たと言える。「今道氏（注、TBSの会長であった故今道潤三氏）が新聞記者時代に、天龍寺の関師に書いてもらった軸に、『無』とあった。同じころ、河上肇に書いてもらったら、『死』と書いた。それを氏は二つながら茶掛にして、茶室を作ったときに掛けた。すると、『無』では何も無くならないが、『死』を掛けると無くなってしまう、という。井上氏はそれを聞いて納得した。『無』という抽象的な言葉は弱く、『死』という直接そのものを指す言葉の強さにはかなわないと思った、とは井上氏の感想である」。

（9）井上卓也『グッドバイ、マイ・ゴッドファーザー―父・井上靖へのレクイエム』（平成三年六月、文芸春秋社）参照。

（10）注（3）に同じ。

（11）三好行雄との対談「作家の内部」（昭和五十年三月『国文学・解釈と教材の研究』）で、井上靖は「いま利休を小説に書いている」と語っている。池田大作との往復書簡「四季の雁書」（昭和五十年七月〜五十一年六月『潮』）でも、昭和五十年八月半ば過ぎから一カ月間を軽井沢の仕事場で過ごしたことについて、「前々からの懸案である利休の生涯を小説の形で綴る仕事に取りかかろうと思ひまして、その大体の構想を立て

るつもりで、軽井沢行きでありました」と書いている。

- (12) 井上靖は「わが一期一会」の最終章「終回到臨んで」の中で、次のように書いている。「(前略)自分が歩んできた過去を振り返ってみると、何となくさんのすばらしい一生に一度の出会いがあることか。(中略)長い人生行路に於て、そこだけが輝いて見えている。(中略) “わが一期一会”では、自分の過去を埋めている茫々たる磧の中から、そこだけきらめいて見えている小さな石ばかり拾って来たような気がする。(中略)茫々たる磧の中から、そこだけきらめく小さな石を拾ったと記したが、そうした石は想像していたよりたくさんあった」。

- (13) 原題「私の履歴書」。単行本として、昭和五十二年六月、文芸春秋社刊。  
(14) 井上靖は『『本覚坊遺文』ノート』でも、ほぼ同趣旨の文章を書いている。

- (15) 福田宏年『井上靖の世界』(昭和四十七年九月、講談社) 参照。

- (16) 作品数は曾根博義編「井上靖作品年表」(『井上靖全集別巻』平成十二年四月、新潮社) に拠る。

- (17) 注(16) に同じ。

- (18) 注(9) に同じ。

#### 付記

井上靖の作品引用は、全て『井上靖全集』全二十八巻別巻一(平成七年四月〜十二年四月、新潮社)に拠った。その他の引用文中、旧字体は新字体に改めた。傍点は私に付した。

(たかぎ のぶゆき、別府大学教授)